

序 文

宮下光令

(東北大学大学院 保健学専攻緩和ケア看護学分野)

ホスピス緩和ケアにおける看護師の役割の重要性はいうまでもなく、わが国のがん対策においてもその役割は質的にも量的にも拡大し続けている。しかし、わが国の緩和ケアにおける看護師の質的・量的拡大については今まで十分にまとめられてこなかった。そこで、『ホスピス緩和ケア白書 2019』では、緩和ケアにおける看護の過去と現状を整理し、今後、看護がどのような発展を目指すべきかを考えるための道しるべとすべく、「ホスピス緩和ケアにおける看護—教育・制度の現状と展望を中心に」というタイトルで特集を組むことにした。

第Ⅰ章では、わが国の緩和ケアの制度と看護について、がん対策基本法・がん対策推進計画やがん診療連携拠点病院などの制度面、および、緩和ケア病棟入院料・緩和ケア診療加算・がん患者指導管理料などの診療報酬の面から経緯と現状についてまとめることにした。

第Ⅱ章は緩和ケアに関する看護師教育について、卒前教育・卒後教育についてわが国でなされている取り組みをまとめることにした。

第Ⅲ章では緩和ケアに関する看護師の専門化の現状と展望について、日本看護協会による、がん性疼痛看護認定看護師・緩和ケア認定看護師・がん看護専門看護師などについて現状と展望についてまとめることにした。

第Ⅳ章では、今後、発展が期待される非がん疾患、在宅ケア、介護施設などの緩和ケアの現状と展望について扱うことにした。

さらに第Ⅴ章では、緩和ケアの看護に関する研究の動向について言及した。

これらの内容について、各分野の最先端の実践家・教育者・研究者に原稿を依頼した。お引き受けいただいた各著者には、冒頭に述べたように「緩和ケアにおける看護の道しるべ」となるよう、現状に重きを置きつつも、歴史と今後の展望についても触れていただくようにした。

本特集の内容は、いままでわが国の緩和ケアを支えてきた現場の看護師たちの努力の蓄積であり、これからを担う看護師たちの希望になるものにした。そして、これらの看護の現状や展望を看護師以外のさまざまな緩和ケアに携わる医療従事者と共有する機会になれば幸いである。